

ハバナの街角で

かいま見たキューバ事情

まえがき

以下のレポートは、今から 22 年前、現役の特派員だった 1984 年のことである。この間に世界の情勢は激しい変化を続けてきた。

ベルリンの壁の崩壊から始まった東西ドイツの統一。ソ連の崩壊とロシアという国名の復活そして各連邦国家の独立。中東のトルコまでを包含しようとする大欧州連合 E U の誕生。中国、インドを初めとする ASEAN 諸国の経済的な台頭。そして 9.11 を淵源としたイラクを初めとする地球レベルでの治安の悪化・・・・。

こんな現代史の流れの中で、キューバは今なおカストロ政権が続いている。革命からすると 46 年。これほど一人の政治家(革命家または軍人とも言えようか)が長期にわたって一国をリードしているケースは極めて珍しい。それを「独裁政権」という人もいる。でも北朝鮮の“ 将軍様 ” のケースと違って、私の見知った限りでは、フィデル(カストロが姓、フィデルが名前で親しみを込めた呼び方になる) 今なお国民に人気がある。政治の処方の問題はあるとしても、少なくとも“ 民衆のため ” という革命時の理想は今なお消えてはいない。そして、社会の体制も一部に資本主義経済の要素を取り入れることはあっても、根本的な転換はない。

教育国である。医師の数も圧倒的に多い。つい先ごろも、世界的な流行病の蔓延防止に、必要とする国に医師団の国際派遣も申し出ている。

22 年前、私が訪れたときは、入国するのに大変な手続きが必要だった。国の経済も貧しかった。でも治安は中南米でも最もよかった。印象に残る思い出も多い。今、観光客はかなり自由に入国できるようになっている。

あれ以来、1996 年に一度訪れただけなのでキューバの「今」はわからない。でも、人々の生き方、考え方に大きな変化はないと思う。うれしいことの一つは、その社会主義の国に仏教徒が誕生し、自らの幸せを確立しつつ、社会に貢献していることだ。96 年には、池田 S G I 会長も同国を訪問、カストロ議長とも懇談した。

そして、その一粒種とも言えるメンバーを私は 22 年前に訪ね、激励できた。そんな感慨を込め、古いけれども参考になることが多いと思い当時のレポートをホームページに掲載した。当時は、観光客はもちろん、特派員が入国すること自体それほど多くはなかったから。この間の変化と現代との対比も面白いかもしれない。(2006 年 1 月 18 日記)

レポートのまえがき

革命の直後からすればかなり解放されてきたとはいえ、キューバに入国できる旅行者は少ない。ビザの取得や入国経路に大幅な制限があるからだ。“鉄のカーテン”と言われぬまでも“カリブの赤い星”キューバもソ連と同様、その実態がなかなか伝えられていないのが現状である。



この度、筆者はメキシコ経由で同国を訪れる機会があった。もとより3日間という短い滞在で正確な評価・判断は下しがたいが、体制の異なる国で見、体験したことはすべて新鮮な驚きであった。一旅行者また一仏教徒としての私の動きの一つ一つが、異った思想、生活様式との出会いであり、それはまた、東洋の資本主義国で生を営む日本人にとっても興味、関心を引くものと思われる。そこで“群盲象をなせる”の恐れを省みず、「私の見た今日のキューバ」を綴ってみた。気軽な訪問記ととらえていただければよい。願わくは、これがお互いの正しい認識と理解に役立ち、親密さを深める一視点となればと思う。事実、私自身、今回の訪問で、キューバが抱える多くの問題を目にし、疑問点を持つにもいたった。にもかかわらず、体制は異なっても、同じ一人の人間として、同国また同国市民に大変な親密感を抱くようになったからである。

本 文

メキシコから“カリブの赤い星”へ

カリブの赤い星・キューバは、ときに国際紛争の焦点になりながらも、なんとなくドラマチックな印象を与える国である。とりわけ、西半球のアメリカ大陸をカバーするジャーナリストにとっては、ぜひとも一度は訪れてみたい国であろう。とはいえ、社会の体制・機構がまったく異なる国である。他の自由主義圏の諸国のように簡単に入国できる状況にはまだない。まず、ビザの取得の壁を越えなければならない。



現在のところ、キューバに入るのには、原則としてキューバ政府の招待によるか、現地に身元引き受け機関のある場合か、観光団体の一員としてしか許されない。一般旅行者は、本国紹介もあり、ビザの発給まで1～2ヵ月かかる。報道関係者は特別に扱われるが、それでもさまざまな複雑な手続きを踏まなければならない。その上、入国経路もごく限られている。



各社の特派員が最も利用する経路はメキシコからの入国である。メキシコ・シティ―ハバナ間にはクバーナ・デ・アビアシオン(キューバ国営航空)とメヒカーナ・デ・アビアシオン(メキシコ航空)が飛んでいる。

メキシコは、米州の中でも、特にキューバに理解のある国であり、人と物の煩雑な往来もある。たまたま筆者の滞在中、カスタロが亡命中でまだお金のなかったころ“つけ”で食べ飲んでいたというアラメダ公園近くのレストランに寄った。その主人いわく。「伝票に彼のサインが残っているよ。これをもとに請求書も送れるけど、これはまあ今となっては家宝のようなもんだからね」

さて、パナマに住む私は4月初め、メキシコから中米の各国を訪問することになった。今、そのいう中米はニカラグアを初めエルサルバドル、グアテマラと、政治的、社会的に大きな曲がり角にあり、その左右の抗争と内乱は、無実の一般市民まで犠牲者に巻き込んで痛ましい。これには米ソを中心とする国際戦略も絡んで、問題を更に複雑化させているが、そのカギ的存在がキューバなのである。その社会主義国に最近、仏教徒が誕生したという便りを耳にした。

社会主義国とはいえ、キューバはもともとカトリックの国である。一体、人々は社会主義と宗教と生活をどう捉えているのだろうか。そして国際政治との関係は？こんな湧き上がる疑問にひかれて、私はメキシコ訪問の機会を利用して、思い切ってキューバまで足を延ばしたのであった。

まず、メキシコ市にあるキューバ大使館に入国ビザを申請する。横30センチ、たて40センチ程の大型の申請用紙は両面印刷で3ページに及ぶ。小さな活字でぎっしり詰まった項目の中には氏名、年齢、職業、学歴は当然ながら両親の名前、思想経歴、宗教および政治活動歴と詳細にわたっている。しかも顔写真は3枚が必要である。

これまでラテン・アメリカの10数カ国を回った中で、これ問・調査項目に会うのは初めてであった。幸いにも愛想のよい好意で、私の場合、特例的に4日間という短時日でビザが発給。ただし、滞在期間は3日間と限られたものである。かくして第一の



ほどの質
受付嬢
された。

“堰”を乗り越

ソ連への旅行時を思い出す

と、キューバはすでにその機内から始まっていた。100人乗りほどの椅子席に、この日の乗客は40人ほど。後方に4発のジェット排気を持った同機はソ連製機である。機内はなんとなく薄暗く他の中南米の国の機ほどあかぬけさはない。

スチュワーデスのアナウンスとともに昼食が出てきた。お米のカレー炒めに細切れ肉の入ったもの。キュウリ、たまねぎ、ピーマンが混ざったすっぱい漬物。パン、菓子、それに小瓶のビールが1本ついてきた。調味料の砂糖は当然ながらキューバ産。胡椒はカナダ産だった。

食事を終わって洗面所に入ると、ふと13年前のソ連を旅行したときのことが思い起こされてきた。ナホトカからシベリアを抜け、モスクワ、レニングラードへと旅をした時のこと。

乗った飛行機、飛行場がまさにこれであった。少々汚れた感じの木製の便器とその蓋。やや褐色のごわごわとした落とし紙。消費物資の生産がもう一步という共産圏に入ったことが、まず身につまされる。

そんな私の個人的感傷にこだわりなく、機はいくぶんの揺れを伴いながらも、紺碧のカリブ海上空を一路、東に向かって飛んでいた。高度約1万フィート、飛行時間2時間30分。午後5時半、機は夕闇せまるハバナのホセ・マルチ空港に着陸した。

空港を出るとタクシー確保の難儀

空港は、カリブ海の“大国”に反して予想外に小さいものであった。成田など大きな国際空港に見られる機が横付けになるゲートはない。ゆったりとタラップを降りた。

からっとした高原としメキシコに比べ、湿気を含んだ生温かなカリブ海の微風が体を吹き抜けていく。迎えのバスに乗って入国審査口へ。ここが第2の関門である。

「コンパニエロ(同志よ)、泊まるホテルはどこ？」

念を入れて私のパスポートを調べていた係官は、顔を上げるとこう聞いた。当方、個人レベルの旅行なので、そんなホテル予約のゆとりも、国外からはその手立てもなかった。すると、私を別の係官(すべて「コンパニエロ」で呼び合う)のところへ送り、「まず、ホテルを決めよ」という。

もっともそれは、こちらが自由に選ぶのではなく、向こう(政府)の師弟によるホテルでなければならない。ところが、その担当者がたまたま席をはずしていたりして結局、税関通過を含めて空港を出るまでに小1時間かかってしまった。

ところが。問題はまだその先からだった。タクシーをつかまえるのに、これまた“大奮闘”をしなければならなかったのである。



ついで先にいつもピカピカの車や出迎えがきている大使館の関係者や、訪問先に支店、営業所を持つ商社員と違って、こちらはいつも入国手続きからタクシー探しまでの一切を一人でやらねばならない。しかも国によっては、そのどさくさにまぎれて起こる荷物の紛失・盗難に気を使わなければならないこともある。

重いトランクを下げつつタクシーを待つ。タクシー乗り場には、30人ほどのキューバ人が列を作って並んでいた。それがほぼ5分毎に1台来るタクシーを待って、結局、私の番が回ってきたのは40分後であった。以下、ハバナ滞在中、このタクシー確保には大変な難儀をしたものだった。

キューバ革命前のアメリカ車が活躍

さて、私の乗り込んだ車は1957年型のアメリカ製ダッジ。街を走っている車には旧い型のものがかかり目に付く。旧型のアメリカ製大型車。それに比較的新しい型では、ソ連製、ドイツ製、アルゼンチン製等々。ラテン・アメリカを席卷した感の日本車は、ここではまったくといってよいほど目に付かなかった。(ただし、日野の大型バスが相当数入っていて、

市民の足となっているようである)

この車の旧さといえば、翌日拾ったタクシーの一つは、実に 1952 年型のシボレーであった。運転手いわく。

「もう 30 年にもなるけど、この車よく走るよ。ダンナ、そんな旧いのに興味があるのなら 1948 年型だって走ってますぜ」

1940,50 年代の型といえば、すべてあのキューバ革命前のものである。とんだところでアメリカ製車の頑丈さを証明しているのは、現在の反米感情と引き合わせてなんとも皮肉である。

タクシーに関してもう一つの新鮮な驚きは、そうした旧型車にもかかわらず、走行(料金)メーターがついていたことである。我々日本人にとって、タクシーに料金メーターが、更に自動開閉のドアさえもついているのが当然のようにになっているが、中南米ではごく限られた国のみである。

これまでの旅のなかで、メーターのついたタクシーとの遭遇は珍しく、私にとってはちょっとした感激でさえあった。なぜなら、いつもタクシーに乗るにあたっては、まず目的地までの値段交渉から始めなければならなかったからである。それが、メーターに出た料金をそのまま払えばよいという(日本では当然の)単純さに、少々あっけないような感さえもしたものだ。

そんな思惑と感傷をのせたまま、57 年型ダッジは夕闇せまる首都ハバナ市内に入った。金曜日の夕方というのに、交通量は予想外に少なく、街全体も静かなたたずまいをみせている。

もちろん、けばけばしい資本主義的なネオン広告はほとんど目につかない。それに代わって「レーニンの教えを最後まで学び実践しよう」との呼びかけと、レーニンの顔が描かれた縦 2 メートル、横 4 メートルほどの看板や、カストロ首相の顔と彼の呼びかけの書かれた看板が街の隅々で目に入って来た。建物の屋上に掲げられた標語も目に飛び込んでくる。「祖国か、死か！勝利を勝ち取ろう！」

運転手もコックもすべて国家公務員

わが“指定された”ホテル「ベガード」は、ハバナ市内のほぼ中心にあった。同国でも「中流の上」と思われるホテルである。

受付でチェックインを済ませ、案内されて部屋へ。このときボウイが　　といっても、もう 60 歳近いと思われる、キチンと黒ネクタイをした人のよさそうなおじさんである　　私の重いトランクを運んでくれた。そんな年配なのに重い荷物運びの労働に、感謝を抱きながらチップを渡そうとすると、彼は逆に手を引っ込めた。そして、はっきりと言ったのである。

「私たちはこれが仕事ですから」

“これが仕事”といっても、チップ社会配者に、ささやかであっても心遣いを上げ



になれた自分にとって、こうした年るのが当然の人間的心情とも思えた

ものだが、やはり社会主義の国なのだ。そういえば、彼自身も、ここのホテルの受付嬢も、レストランのコック、ウエイトレスも、そしてタクシーの運転手もすべて国家公務員なのである。

案内された部屋には一人用ベッドが二つ。ジュウタンはない。風呂はなくシャワーが。テレビはなく、その代わりサンヨーのトランジスタラジオが枕もとにおいてあった。クーラーもついてはいたのだが、どうも音がうるさくて、とうとう使わずじまいだった。これで一泊14ドル。これは部屋自体の質素さを考慮に入れても、かなり安い値段である。この程度のホテルで他の中南米の国であれば、まず20ドル以上はするであろう。

ためしにトランジスタラジオをつけてみる。リズム感あふれるラテン・アメリカの音楽が流れ出した。メキシコやパナマなど、どことも変わらないボリューム高い音調である。ときどきア



ナウンスが流れた。

“EL PRIMER PAIS SOCIALISTA EN AMERICA LATINA, 24 ANOS DE LA REVOLUCION” (ANOS の“N”の上には～<チルデ>がつく)

文字通り訳せば「ラテン・アメリカで最初の社会主義の国、そして革命24年目」ともなるのか。だが、この“PRIMER(最初の)には、キューバに続いて第2、第3と社会主義国がこの中南米の地域に打ち立てられていく、いや打ち立てていかな場ならない、とのニュアンスも含まれているように思われる。革命なって24年。いつまでもその出発点を失わず、国民に訴えていくことは、革命精神の継続と、市民意識の堅持に力あっているのかもしれない。

少々の緊張と疲れと、じっとりとした汗をシャワーで流してから、エレベーターで5階から1階のレストランへと降りた。5人乗りほどの狭いエレベーター内にも、丸い椅子に座った、これも“国家公務員”の年配のエレベーター係りが同乗している。

政治とは別世界の各国からの観光客

レストランは各国からの観光客の団体でいっぱいだった。メキシコ、スペイン、フランス、カナダ、それにアメリカ人さえも大型観光バスに乗って各地を回っている模様だ。

レーガン カストロと、その政治的トップレベル間の関係が、常時、緊張状態にあり、一時、アメリカがキューバに侵攻するというまことしやかな情報が世界のマスコミを駆け巡ったことさえあった。しかも、そのキューバからの亡命者(難民)を、アメリカが多量に受け入れている、といった複雑な政治関係下にもかかわらず、一般庶民レベルでは、こうした観光が続いているのは面白い。これはまた、人間の本来的な欲求と自然の姿なのでもあろう。そして、それは少なくとも、両国間の理解と友好につながっていく……。事実、どこにあっても明るく陽気な彼らの動きは、はっきりと「アメリカ人」とわかるものだった。



テーブルに置かれたメニューに目をやると、その値段も比較的安い。簡単な肉料理とスープと野菜サラダ、それに小瓶のビール1本で4ドルほどになる計算だ。これは、国民の収入水準からしても当然ともいえようが。ちなみに、20歳前後の若者の給与は月90ペソ(約

100 ドル)ほどと聞く。

ただし、これは主に外国人旅行者が泊まるホテルでのことであって、キューバ人向けの一般レストランでは、更に安くなり、また状況も違って来る。

そもそも、大部分の消費物資が配給制度で市民に届くキューバでは、肉は月に1回か2回ほどしか手に入らない。恒常的な消費物資の不足。また、レストラン自体の少なさから、一般キューバ人がレストランで食事をするためには、事前に予約をし、ときに長い列を作って待たねばならないのである。

さて、夕食を済ませると、訪問を予定していたC氏を訪ねようと、ホテル前の道路に出た。タクシーの呼び出しは、一流ホテル以外は難しいからである。薄暗いホテル前の路上で待つこと30分。この間に3台のタクシーが通ったのだが、そのどれにも先客が乗っていた。ハバナの夜の治安は心配ないというが、添えでも時間の遅いことと、C氏までの距離の遠さから、とうとうこの夜の訪問は断念する。

初老のC氏を自宅に訪問、歓迎される

翌朝。今度は近くの「キューバ国立ホテル」まで歩き、ここでようやく“足”が確保できた。C氏の家は、ハバナ市の中心からやや外れた平靜な住宅街にあった。昨夜のホテルからの電話で、私を心待ちにしてくれていた初老のキューバ人C氏は、タクシーから降りた小柄な私を、太い腕で厚い胸の中にガッシリと抱擁した。



キューバ国立ホテル

「ムイ ビエンベニード！（遠いところ本当によろこそ！）」

初対面にもかかわらず、一気に十年來の知己のような親しさの中で話に入っていったのであった。

端正な顔立ち。髪に白いものが混じりかけている。65歳。もと、雑誌記者をしていたという氏の書斎には、何百、何千という原稿をたたき出してきたであろう古いタイプライターがデスクに置かれており、3メートルほどの高さの大型本棚には、百科事典を初めとした本がぎっしりと詰まっていた。

ギリシャのパルテノン神殿風の、丸い柱のある玄関を持つ、2階建ての家には部屋が九つ。階段や床の大部分は彫刻の入った大理石敷き。古いが荘重な家具とあいまって、ちょっとしたパラシオ(宮殿)を思わせる作りである。

「革命前に建てられたんですよ。かつては両親や兄弟が住んでいて賑やかだった。でも、皆いなくなってしまう、今は私たち夫婦二人のみ。それに六匹の犬と猫とネ」

大きなソファに身を沈めた妻のAさんは、かけよってきた猫の頭に手をおいた。子供のない夫婦は「この犬と猫が自分たちの子供」と、全員(犬、猫)にそれぞれの名前を付けて呼んでいた。

それにしても残念だったのは、3週間前、パナマから出した手紙が2通ともまだ届いていな

かったことである。郵便事情は、はっきり言って遅い。後でキューバ事情に詳しい日本人のM氏は、次のように言っていた。

「日本からの航空郵便でも、ときたま1ヶ月から2ヵ月かかることがありますよ。それに西側の雑誌類　これはまあ届かないと思った方がいいんじゃないですか・・・」

“カリブの赤い星”で同志と感動の勤行

話は佳境に入る。そもそも、私のC氏訪問の目的は、彼がつい最近、仏教徒になったと聞き、その激励と懇談のためであった。

社会主義国キューバの一市民である彼は、国外に住む友人のキューバ人N氏から仏法について聞いたという。その後、手紙によるやりとり、またN氏のキューバ訪問等により、次第に関心を深め、約4年前から唱題を始めた。そして、ついに本年の1月1日に御本尊を受持することができた、というものであった。(ここに至る経過は、N氏の手記に感動的に語り尽くされている)



自宅前のCさん夫妻

ともあれ、信心を始めたC氏が、病気の克服、家庭不和の解決と、社会体制の異なる土壌にもかかわらず、あふれるような功德に浴している姿は、何ものにもかえがたく嬉しかった。彼は、御本尊のために特別に設けられた2階の“仏間”に私を案内した。御本尊の御安置、お水、線香、ローソク等の供え方もしかとしたものである。

「Nさん、よく面倒をみてくれてありがとう」　私は、思わずN氏の奮闘に心からの称賛を送りたい衝動に駆られた。

私たち二人は、そこで一緒に朝の勤行を始めた。

「妙法蓮華経方便品第二・・・」

“カリブの赤い星”キューバで、キューバ人の同志とともに、御本尊に向かったの朗々とした唱題　なんともいえぬ感動が胸奥より込み上げてくる。

もちろん、初信の彼の勤行には、リズムといい、発音といい、まだ足りない面もある。しかし、これは、まったくの異国で、たった一人で信心を始めた日本人とて同じであろう。それよりも「これでよいでしょうか」と、ご供物、線香の供え方、リンの打ち方を確認し、更に「勤行のリズムの矯正をしてほしい」と、真剣に迫ってくる彼の真摯な求道心が、そのリズムや発音の不確かさを補って余りある、と私は思った。

勤行を終わって懇談に入った。キューバの現在の社会状況、市民の生活、更には、信教と布教活動の自由に話は及んでいく。

政府に逆らわない限り宗教の自由が・・・

「一口で言えば、信教の自由は保障されています。座談会の開催も、政府の方針に逆らわない限り、一般的な宗教活動も自由です」

彼は、もとジャーナリストらしい口調でこう解説した。これはその後、何人かの関係者から聞いた内容とも同じであった。

一体、社会主義国とはいえ、キューバはスペインによる征服以来の歴史をみても、もともとカトリックの国であった。しかも、ソ連、中国とはまったく違ったラテン・アメリカ民族特有の生活感情を持っている。こうした市民の宗教感情を締め出すのは、革命政府といえども差し控えたのであろう。ただし、反政府的な言動をしない、とのただし書き条件をつけて

。

事実、ハバナ市内には多数の教会が残っているし、革命後もキューバ政府はローマ法王庁との関係を維持している。

翌日訪れた歴史と伝統をもつ教会では、ちょうどミサを行っていた。しかしながら、椅子席で300人ほど入れる、広い格式ある教会内にもかかわらず、参集者は50人前後と少なかった。案内にあたってくれたタクシーの運転手は言葉をついだ。

「どこの教会も同じ傾向ですよ。参集者のほとんどが年配者で、若者たちは学校での共産主義教育の結果、無神論に傾き、信仰をもつというのは、ごく稀です。むろん、私もですがネ」



ところで、宗教と社会主義体制、あるいはその根底となる唯物主義 **カトリックの教会**とはどのような関係にあるのだろうか。私は、この日、C氏と、また翌日、市内案内にあたったK氏とお互いの考えをぶつけ合った。そこから、己の浅学も省みず、導き出した私なりの結論は次のようであった。

経済的平等から生命次元での平等へ

なるほど、ごく短時日ながらいまみたキューバの人々の生活は安定しているように見える。街の治安もよい。ハバナはかつては悪徳の町であった。ギャンブルと高級売春婦が幅をきかしていた。巨万の富を持ったごく一部の富裕階級と、食べるものも満足になく、一生に一度、医師に診てもらう機会もなく、奴隷状態に近いなか働いてきた農民。それが他の中南米の国々で見られるような乞食もなく、泥棒もいなくなった。

これは、失業者がないからである。仕事がなければ国が与えてくれる。市民は働いてさえいれば、最低限の生活は保障されているのである。教育費も医療費も完全に無償。この点は、多大な貧富の差、失業などの問題を抱えた資本主義国側から見れば、うらやましくさえ見えてくる。

そもそも、共産主義の目指すものの一つは経済的な平等である。そしてその目標は、いくつかの問題を抱えつつも、ある段階までは達成されつつあると言える。むろん、先に述べた、国内的、国際的な問題 **つまり、思想・表現の自由の欠如、ときには侵略主義ともとれるような軍事援助など根本的な課題を抱えている**。ただし、ここでは本文の主旨でもないの、それ以上は触れない。

しかしながら、それらの問題に対して目をつむり、更に一步譲って、仮に経済的平等が

達成されたとしても、人間の本当の平等は共産主義だけでは実現されない。人間の本来の平等　それを私は“生命次元での平等”と呼ぼう　は、唯物論のみでは絶対に達成されないのである。



落ち着いた地味な感じのハバナの海岸　同じ経済状態にありながら、不良息子を持つ親の悩み、家庭不和、医師に見放された病人の苦しみ、人生の生きがい、といったものは、唯物主義では解決できない。しかも、同じ家庭に生まれながら、頭の良い子、悪い子。器量よしと不器量の女の子。時には、身障児としてこの世に生を受けてくる不平等は、何をもってその因を説明し、また解決できるというのだろうか。まして、仏法で説く“宿命”は、唯物論では絶対に説明がつかない。

ここに、生命次元からその法理を明らかにした哲学、またその実践方軌を示した宗教の存在が必要となってくるのである。その宗教とは、科学弾圧の歴史をもっていたり、現代科学の発達とともに、矛盾や対立点を露呈するものであってはなるまい。

かつて、マルクスが「宗教は民衆のアヘンである」と喧伝した。しかし、彼の言う宗教とは、当時のヨーロッパに浸透し、先に指摘した科学弾圧の歴史や矛盾点を抱えるキリスト教であった。そしてそのキリスト教の幻想性を宗教一般の幻想性としてしまった。

以後、「宗教はアヘン」との言葉のみが、その心に意味するところが伝わらないまま、宗教そのものを否定する言葉として、意図的に使われてきたのである。

残念ながら、当時、彼は日蓮大聖人の仏法の存在を知らなかった。もし今、仮に、彼がその合理性、普遍性をもつ仏法を知っていたとしたら、その言葉も大きく異なったものになっていたことであろう、と思う。

唯物思想、唯心思想を止揚した仏法哲理

唯物思想も唯心思想も包含止揚した色心不二の生命哲理こそ、行き詰まり対立した現代の世界を解くカギであろう。そして宗教として、その具体的な実践方途である勤行・唱題が、人々をして、その生命次元からの変革を可能にさせる。更には、仏性を涌現した信徒一人一人の力が、また、その実践者の団体であるSGI(創価学会インタナショナル)の具体的な平和活動が、世界の平和構築の未来に大きな力となっていくであろうことを実感するのである。

社会主義の国に住むC氏の病気、家庭不和を克服した体験が、その原理を語り尽くして余りある。

政治と宗教は次元も異なる。ここで体制の云々について触れるのは、あまりにも大きな課題で筆者の力の及ぶところではない。ただ、ここで一つだけ言えることは　時代は、社会変革から生命の変革へ、と流れており、人間を生命次元から解放、変革することのできる正しい宗教は、どんな政治体制下にあっても必要であり、また求められるべきである、

ということである。

こちらから送っていた出版物も完全には届かず、十分な勉強もできなかったというかつての雑誌記者C氏は、自分なりの理論も構築しながら、私の意見にうなずきかけるのであった。今、この小さな妙法の灯が、何十年先には、時代の大河となって、民衆の幸せの歴史を刻んでいてもらいたい、と強く願う。

コロンブスのカリブ海探索と、スペイン人の上陸。同時に流れ込んだカトリックの、ほぼ5世紀にわたる歴史。そして共産革命24年というキューバの歴史のなかで、私は妙法流布のはるかなる未来に思いをいたしてみたのであった。

国営キャバレー「トロピカーナ」での戸惑い

この夜、すべての予定が終わった11時過ぎ、国営キャバレー「トロピカーナ」へ足を運んだ。在住の日系人からも「キューバの一面を知るためにもぜひ見ておくべきですよ」と勧められていたからである。

なるほど、世界でも有数という、星空下の野外ショーは、キューバというよりラテン・アメリカ人の民族感情、文化的伝統に触れるのに恰好の催しであった。

大木と森の中のような自然をそのまま生かし、それに大掛かりな舞台をかみ合わせた自然と造形の巧みな融合。やしの木から覗いて見る夜空には、星が降るように輝いている。たぐいまれな演出である。乾季には雨の心配もない。

この舞台の周りは野外レストラン風になっており、千人を収容できるといふ。それぞれ、テーブルを囲んで夕食をとり、ビールやウイスキーを飲みながらショーを楽しむのである。舞台では、超ビキニに、原色の派手なカリブ風衣装をつけた、はちきれんばかりの豊かな胸の女性が、ネオンの輝くもとに乱舞していた。ときに観客席まで降りてくると、こちらがそのボリュームに圧倒されてしまいそうだ。



ラテンの激しいリズム。ブラジルのサンバ。アメリカのディスコ調音楽とアフロ・キューバン・リズム。この中にいると、つい“これが共産主義の国だったかな？”と疑ってしまう。キューバの社会主義は人民の楽しみを奪ってはならない、という。ソ連や東欧の共産圏からの、政府のお堅い招待客も、これにはきっと戸惑うばかりであろう。その大部分が観光客向けだとはいえ、やはりここは、もともとマンボ、チャチャチャなどで、世界を風靡したアフロ・キューバン・リズムを愛好する民族の血が、政治体制とは関係なく反映しているのである。

社会主義革命の成否は歴史が判定する？

さて、もう一度現実のキューバに戻ろう。

翌日の日曜日、私はタクシーを拾い、市内の写真撮影に出かけた。幸いに、このときは10分ほどで車は見つかった。運転手は、東洋からの異邦人を珍しいとみたのか、キューバ

の史跡、文化遺跡を彼なりに懸命になって説明、案内してくれた。

18世紀、イギリスの海賊の攻撃から守るためにつくられたモロの要塞。紺碧の海に沿って美しく延びるマレコン通りと調和した市内のビル群。そしてカストロ首相が、革命の旗揚げをしたときの戦艦「グランマ号」や戦車などを陳列した博物館・・・。

一口に言って、キューバ、特にハバナ市内はメキシコよりもスペイン的だ。町並みは洒落ていて土臭さがない。革命後、塗料がなくて、灰色の町といわれた首都ハバナも、路上には塵も見当たらず、落ち着いた美しいたたずまいをみせていた。



たった3日間で、人々の心のひだや生活の奥まで知るのには難しい。キューバで進行中の社会主義革命という実験の成否は、いずれ歴史が判定するにしても、バチスタ独裁政権時代の一般民衆の生活の悲惨さから見れば、比較にならないほど改善されていることは事実である。

キューバの未来を担う高校生たち

ハバナ滞在中に利用したタクシーが5台。その運転手ごとにも、各種の質問をぶつけたが、みるところ、現体制支持派が4人、反対派が1人であった。官僚性と人々の勤労意欲の欠如を指摘した、飲み屋で会ったキューバ人もいた。工場の生産性の低さ、経済の停滞、また、なかなか向上しない生活レベルの低さを指摘する声もある。

そして、世界のマスコミの焦点となった、つい先ごろの、アメリカへの10万人を超える大亡命。しかも、今なお亡命の潜在的希望者は何十万といる、という事実は、現体制が必ずしもすべての国民の満足のいくところとなっていないことも裏付けている。また、その一方で、アメリカの生活に耐えられなくなった亡命キューバ人が、帰国したくてもお金がなく、ハイジャックをして、一度棄てた母国に戻る、との逆現象も出た。

こうした複雑な国際政治上の問題や背景、その方向性もすべては掌握しがたい。また、キューバの体制が良いか悪いかの結論も簡単には出ない。

にもかかわらず、私はこのカリブの島に足を踏み入れたことによって、今までの10倍にも増してキューバに親しみを抱くようになった。それは、一般市民のゆったりした笑顔からか、治安のよさからくる安堵感からか、あるいはまた、妙法の一粒種C氏との対面からか・・・。

タクシーの確保、ホテルの移動などで若干の難儀があったにもかかわらず、“私のハバナ”は、心のフィルムに鮮明な印象を焼き付けた。それは単なる“旅情”といった感傷を越えたものである。



このキューバが、一人一人の市民の幸福と、本当に人類の平和につながる方向に進んでいってほしい そんな切なる一旅行者、そして一仏教徒の願いを乗せつつ、メヒカーナ 841 便は、真っ赤な太陽が沈みかける夕暮れのハバナ空港から、メキシコに向けて飛び立ったのであった。